

## 阿保神社本殿 覚書 所在地：大阪府松原市阿保

神戸大学名誉教授 黒田龍二  
(建築学 日本建築史)

はじめに

2022年2月17日、現地を訪問し、写真撮影等の調査を行った。目的は、建築史ならびに文化財の観点から、本殿の概要を把握することである。

### 1. 規模・形式

一間社流造 銅板葺 17世紀前期

身舎円柱 切目長押 内法長押 頭貫 木鼻 大斗拳鼻(仮称) 実肘木 中備藁股(正面はなし) 二軒繫垂木 妻飾虹梁大瓶束 庇角柱 地長押 腰長押 虹梁形頭貫 木鼻 大斗拳鼻(仮称) 連三斗実肘木 中備藁股(身舎正面および庇はなし) 二軒繫垂木 三方切目縁 脇障子 擬宝珠高欄 木階五級 浜床

正面 1.52m (5尺)、奥行 2.36m (7.8尺)

### 2. 現状

#### (1) 全体の状況

本殿の形式は一間社流造で、亀腹の上に土台建てとし、屋根は銅板葺である。規模は正面の柱間 1.52m (5尺)、奥行 2.36m (7.8尺) で、国指定文化財と比較するとやや小規模である。しかし、指定文化財以外の一間社流造本殿の数は非常に多く、かつ小規模本殿が多いとみられるので、一般的には大きい部類に属するだろう。

建設年代を示す確実な史料は知られていない。様式および材の風食等を総合すると17世紀前期ないし中期の建設とみられ、ここでは17世紀前期と推定する。覆屋に入っていて、手厚く保護されており、保存状態はよい。平成7年(1995)に改修が行われた。また、近年の彩色によって材の新旧が見分けにくくなっているが、垂木材は新しいとみられる。本殿背面の扉も近代以降の造作とみられるが、それ以前の形状は明らかではない。小屋裏は未見である。

身舎(もや)の規模は桁行一間、梁間一間で、正面と側面に切目縁を廻し、背面柱筋に脇障子を立てる。正面に木階五級と浜床を設け、縁と階に擬宝珠高欄を設ける。軒は二軒繫垂木で、正面側は地垂木を打越垂木とする。屋根は銅板葺である。

身舎正面にガラス入りの木製引違い格子戸4枚をはめ、両側面は横板壁、背面には両開きの両折れ棧唐戸を設ける。内部は板扉で前後に仕切り、奥を内陣、手前を外陣とする。内陣に厨子を置く。外陣天井は板張り天井である。

本殿背面の扉は神社本殿では数少ない。例えば吉備津神社本殿(国宝、岡山県岡山市、応永三十二年(1425))にあるが、神座から遠い位置であり、神座のある内陣は板壁で嚴重に囲ま

れている。北野天満宮本殿（国宝、京都府京都市、慶長十二年（1607））も背面中央に扉がある。本殿は桁行三間、梁間二間の内々陣の四周に一間幅の内陣が回る構成である。その背面側内陣の中央に、神仏分離まで舍利塔が祀られていた。背面側の扉の中央に設けられた門は舍利門と呼ばれ、ここから本殿背面の舍利塔を拝したと考えられる。背面扉はそのことと関係するだろう（注1）。これらの本殿は独自の性格をもっている。

神社本殿の最も一般的な形式である流造本殿では、背面扉は極めて数少なく、春日造本殿では未見である。一間社流造の本殿における背面扉は、当社以外に筆者は知らない。

## （2）身舎と庇の構成

身舎の柱は円柱で、切目長押、内法長押、木鼻付の頭貫で固め、柱上に後述の特殊な組物を置く。庇の柱は面取角柱で、覆屋の床に接して地長押を打ち、腰長押、虹梁形頭貫で固める。組物は身舎の組物を連三斗とした形である。身舎柱の上端と庇の桁を海老虹梁で繋ぐ。海老虹梁はほぼ水平である。

## （3）細部意匠

組物は特殊な形で、大斗に両端を拳鼻とした杵肘木を組み、その交点に方斗実肘木を置いて桁と梁を受ける。柱上の大斗に方斗が載るだけの単純な構成だが、下から頭貫木鼻、杵肘木木鼻、実肘木木鼻が三段に重なり、複雑な華やかさをみせる。杵肘木は両端を拳鼻として上方に上げ、実肘木の下端に接している。その原形を出三斗における肘木と巻斗とみると、両者を一体化して変形したものといえる。この組物の一般的な呼称はないと思われるので、仮に大斗拳鼻としておく。この組物は肘木と斗からなる通常の組物より単純だが、よく目立つ特徴的な意匠であり、この本殿の第一の特徴である。

中備は両側面と背面に臺股を飾るが、身舎、庇とも正面にはない。欠失したのかも知れないが、見た限りでは桁などに顕著な取付き痕はみられない。臺股のような中備の装飾はまず正面に飾るのが通常であるが、ここでは身舎、庇ともに正面側の中備がない。その理由は分からないが、珍しい事例である。

## （4）彫刻

庇の柱を繋ぐ虹梁形頭貫の木鼻彫刻は頭が竜に類似し、足に蹄があるので麒麟であろう。灰色を基調として鬣に金色を使う。中備の臺股の脚は明るい青色で、内部の彫刻は多色の写実的な色使いである。向かって右側面の身舎の臺股の彫刻は波に兎、左側面は二頭の鹿のようだが、角はなく、不分明である。背面は流水と水草である。右脇障子は竹に虎、左脇障子は松に鶴である。

## （5）彩色と金具

外観は落ち着いた色調で、全体に近年の彩色が施されている。柱、梁、桁、長押、垂木などの構造材はやや暗い色調の赤で、弁柄であろう。垂木の木口には金具を打ち、その他の木口は黄、絵様には薄い緑を入れる。縁および高欄も軸部に準じる。壁は白色に塗る。

正面側の内法長押、切目長押の両端に入八双の飾金具を付ける。高欄の正面側では地覆、中桁、架木（ほこぎ）それぞれの柱際と中央に八双金具を付ける。

内外障境の切目長押、内法長押は、外部とは異なる明るい朱色で、丹塗りであろう。外部の塗装より以前の塗装と思われる。両開き板扉の表側には、中央に様式化された松とその背景に日輪を描く。松は図案化した松葉を緑ないし青で描く。日輪は赤、空は金、空の下は全体に青とするが、境界が大きく波打つので、波を表現した海であろう。吉祥の表現とすると日の出と思われるが、神社の所在地を意識したとすると海は西方なので入日ということになる。このような扉絵の類例は少ないだろう。

#### （6）厨子

内陣に厨子を安置する。厨子は方一間で、屋根は向唐破風造である。二段の台座の上に円柱を立て、頂部を内法長押で繋ぐ。正面建具は両開扉で、内法長押の中央と隅に八双金具を打つ。柱上に平三斗実肘木の組物を置く。中備は墓股で、彫刻は梅に鶯だろう。組物の上は唐破風の形の板壁で、奥行の桁の端を作り出すが、梁行き材の表現はない。唐破風の中央上部に懸魚を飾る。二段の台座はともに上面の角を唐戸面とし、面の部分に金箔を置く。極めて豪華な厨子である。

正面と側面は光沢のある黒漆塗りとし、小脇壁、組物、小壁、墓股、唐破風妻壁、懸魚、破風板の眉は金箔とする。扉にはそれぞれ梅鉢紋を金箔で表す。背面では板壁を黒く塗るが、塗りは簡素で、柱、梁、台座などは素木である。背面側は人目に触れることを想定していない造りである。

#### （7）背面の扉

背面の扉構えは神社本殿では稀少な事例である。この場合、神座のある内陣に直接設けている点が特に注目される。背面扉は外開きの両折棧唐戸で、外側に取付けた門で施錠している。年代は、両折戸の丁番を取付ける釘が丸釘で、扉とその周囲の材も風食が少ない。よって、現状は近代の造作とみられる。それ以前も同様の形であったかどうかは分からない。

#### （8）保存状況

部材の残存状況は、塗装のため風食などによる仕分けは難しい。垂木、正面のガラス戸、背面の扉構えは近年の材であるが、その他の部分は古材を残すとみられる。

#### （9）評価

当本殿は、一間社流造の優作である。建設年代が古く、様式に特色がある。特に組物の大斗拳鼻（仮称）は珍しい。拳鼻を上の実肘木近くまで反り上げる特異な形で、出三斗の変形ともみられる。一般的に17世紀前期以前の神社本殿遺構は数少なく、建築年代と様式の双方において、当本殿の文化財的価値は高い。背面扉も事例が少なく注目される。現状は近代の造作と判断されるが、この形の成立年代については、より詳細な調査、検討が必要である。

### 3. 特色と今後の課題

#### (1) 組物

ここで大斗拳鼻（仮称）と呼んだ組物は、この本殿の大きい特徴である。柱上の大斗に両端を拳鼻とした枳肘木を組み、その上方斗実肘木をおいて桁・梁を受ける。拳鼻は先端を実肘木の下端まで迫り上げる。その原形は出三斗と考えられ、枳肘木と先端の斗を一体化して上向きの拳鼻に変形したものと解釈できる。身舎では大斗の下に頭貫木鼻があり、頭貫木鼻、枳肘木木鼻、実肘木木鼻と三段に木鼻が重なる。庇の組物は、大斗拳鼻の連三斗で、肘木木鼻を拳鼻とするのは身舎と同様である。

この特徴的な組物の建築史上の意義については、周辺地域の類例調査が必要であり、地域、年代、大工等を比較検討することが重要であろう。

#### (2) 背面の扉

本殿背面に扉がある事例は極めて少ない。古い事例として御上神社本殿（滋賀県、鎌倉後期、国宝）があるが、当社のように神座のすぐ後ろに扉があるわけではない。御上神社本殿の背面側一間通りは神具などを格納する納殿（倉庫）であり、そのための扉である。山を拝するための扉という説もあるが、実態は異なる（注2）。阿保神社本殿の背面扉は内陣に直接設けたもので、扉を開くと神座を納める厨子があり、御上神社本殿とは基本的に異なる構成である。

山野美江氏の論考（注3）では、全国で15社の背面扉を有する神社本殿があげられ、そこには御上神社本殿も含まれている。阿保神社本殿との比較検討に関しては、第一に阿保神社と同様に神座のある内陣に直接設けられた背面扉を有する本殿を検討すべきだろう。

阿保神社本殿の背面扉に関して、第一に検討すべき基本的な問題は、本殿の建設年代が17世紀前期と推定されるのに対して、背面扉は近代の造作とみられる点である。すなわち、本体の風食に比べると背面扉とその周辺の部材は風食が小さく、また背面扉の取付け部と両折れ部分に使われる蝶番も古いものではない。よって、現在の背面扉は近代以降の造作と判断される。それ以前に背面扉が存在したかどうかは、現段階では判断できない。詳細に調査すれば判明するかも知れない。また、信仰の面で背面から拝することがあったかどうか、歴史的な調査も重要である。年代はさておき、神社本殿の背面扉は珍しいものであり、近代の造作としても、その理由、用途は究明すべき課題である。

#### 注

注1 拙稿「北野天満宮本殿と舍利信仰」（『中世寺社信仰の場』思文閣出版、1999年、所収）

注2 拙稿「御上神社本殿考」（注1前掲書）

注3 山野美江「阿保神社本殿背面の戸に関する考察－棧唐戸はなぜ設置されたのか－」（神社神道演習研究論文）の表「本殿背面扉の調査」

（令和4年（2022）4月13日）